

4

昭和38年より三年間にわたり研究調査をおこなう「文学遺跡研究」の第一回中間報告を終りたい。

文学碑を基として、古典文学と風土の問題（万葉集東歌）を考察するのであるが、実地踏査によって、それら

の風土にふれ、その上に立って種々考証を加えていきたい。そうすることによって、古典文学の生まれた姿を明らかにすることが出来るのではないかと思う。

なお、実地踏査については、写真撮影（カラースライド）、拓本採集もあわせて実行していることも附記したい。

江戸キリシタン屋敷について

栗原元吉

幕末日本に於ける洋学の興隆は、宝永6年11月（1709年）新井白石が徳川六代将軍家宣の旨を承け、江戸キリシタン屋敷において伊太利人の切支丹宣教師若望・洗者・志度智（ジュアン バプチスタ シドチ Giovanni Battista Sidoti ヨハン・シドチ或はシローテと転訛せらる）を訊問し、其の言を筆録して「西洋紀聞」、「采覧異言」の二書を編述し、これを将軍に献納したることを以て、その動機を作ったもの、と断言して差支ないと信ずる。これより先き本邦には天文年間、即ち16世紀中葉以来葡萄牙人の来航あり、続いて基督教の伝播あり、織田、豊臣の時代を通じて一時其の弘通著しく、日本の文化に甚深の影響を及ぼす勢であったが、周知の如く寛永15年（1638年）以来徳川幕府が鎖国の禁令厳しく、支那人、和蘭人以外、一切の外教外人を追放したるため、日本は世界歴史上、殆んど空前絶後とも云うべき特殊の事態を現出し、全然世界の大勢より孤立するに至った。而して白石が前記伊太利宣教師の訊問を始めた当時は、既に鎖国の実施以後約1世紀の歳月を経過し居れるを以て、為政当局者を始めとして、一般士人衆庶は全然世界の形勢を知らず、ただ僅かに長崎在留の蘭人を通じ、或は舶載の漢籍を読んで、その片鱗を憶測するが如き状態であった。白石のこの挙は実に彼が学者としての非凡なる識見を示すものであり、日本における西洋学術の基礎は彼によって植えられたと称すべく、彼を目して現代日本文明の開路者と尊崇するの価値ありと信ずる次第である。

寛永の禁令以後、幕府の外教に対する措置は峻厳を極め、日本国中迫害の手は至らぬ限も無く、切支丹信徒等は以前優勢であった関西地方から、漸を追うて、当時国内における未開地域たりし東北地方に遁走し、それも鉱

山が漸く此の方面に開発されつつあったので、其の縁故を通じて鉱山労働者に変身し、奥羽地方から北海道函館江刺方面にその活路を求めた、今日此等の地方に案外切支丹遺跡の存在するもの多きは、主として此の故である。尚ほ幕府は引つづき彼等を追窮して止まず、屢々諸藩に厳命して、其の領内の切支丹信徒を羅致して、悉く江戸に送らしめた。当時幕府の大目付として之が取調べの任にあった初代切支丹奉行井上筑後守政重（下総に1万5000石の領地を有す）は、その江戸下屋敷なる小石川小日向なる茗荷谷の邸宅をその収容所に宛て、罪状に従って或は死刑、禁錮等の刑に処したのである。彼は以前に切支丹大名の一人たりし蒲生氏郷の臣下にして、比較的よく信徒の実状に通じ居るを以て、信徒等の決心牢く徒らに極刑を以て之に臨むも案外効果無きを慮り、結局之を秘密裏に処分して世間に知らしむること無く、漸を追うて世人の記憶より此の事を遠ざけて、忘却せしむるに如かずと思惟し、漸次この方針を採るに至った。これを以て江戸に於ては元和9年10月13日（1627年）札ノ辻の大処刑を始め、寛永・正保年間を通じて両3回の迫害ありしのみで、その以後は又之に類する惨劇の公然行われたること無く、諸国より江戸に送致せられた切支丹信徒は、悉くこの切支丹屋敷（一名山屋敷）に於て、秘密裏に処分せられ、世間は殆んどその消息を聞かず、白石のシドチ訊問に当る頃は、さしもの大迫害、大惨劇も全く世人の耳目より遠ざかるの結果を来したのである。

然らば寛永鎖国以後羅馬法王庁は日本に対し如何の態度をとったかと云うに、その以後も屢々宣教師を派出したのであるが、孰れも幕府の手に捕へられて切支丹屋敷に送致せられ、基の信仰を変ぜざる者は悉く殺されたのであるが、中には拷問の苦しさに堪へず、全く信仰を捨てた所謂「ころび切支丹」も相当あったわけで、彼等は切支丹屋敷内に住居して生涯禁錮の生活を送り、多くは其の牢内で死んだのであるが、中には幕府に仕へて日本名を名乗り、日本婦人を妻とし、スパイの如き役目を演

じ、中にも医術の心得ある者は其の術を施として相当世人に名を知られた者も少くない。所謂和蘭医術と称せらるる秘法は一に彼等から伝へられたもので、往々民間に伝承せられて居た。伊太利人ヨゼ・ポーロの岡本三右衛門、同フランスコ・ジュアンの黒川寿安、葡萄牙人沢野忠庵の如きは、その著しい者であった。就中忠庵は慶長7年に渡来、長崎にて「穴吊し」の刑に逢ひ、基督教を捨て、禅宗に改宗し、幕府より扶持を賜わりて『目あかし忠庵』と綽名され、寛永13年「頭偽録」を著わして切支丹信者に改宗を勧めて居り、慶安3年(1650年)70歳を以て歿している。「踏絵」の刑罰は実に彼の創案だということであり、彼はまた天文、医術等の心得もあり、南蛮流外科医術は彼の所伝と謂われている。斯様な状態で其の後は宣教師の渡来する者漸く少なく、宝永のころ即ち18世紀に及んでは一時全く杜絶したのであったが、端なくも爰にシドチの渡来を見たのであった。

Giovanni Battista Sidoti は1668年(寛文8年)を以てシシリイ島パレルモに生れ、羅馬にて勉強し伝道師の資格を得たが、彼は日本への伝道が皆不成功に終り、法王庁派遣の宣教師が相次いで殺され或は行方不明に成つたのを見て、特に法王クレメント11世に請ふて日本伝道を志願し、1703年(元禄16年)ジェノアより仏蘭西船に乗って印度に來り滞在4年、それからマニラに渡って在留日本人より日本語を学び、種々の準備を整へ、マニラ総督の斡旋にて1708年(宝永5年)サンタ・トリニダット号にて日本に來り、単身薩摩の屋久島に上陸したものである。其の時の模様は當時を去ること遠からざる享保5年(1720年)出版の西川如見が「長崎夜話草」に左の如く誌してある。

「宝永の頃にや羅馬国邪法の徒、呂宋島に來り居て彼地の船に乗って日本薩摩国夜久の島に來て、一人船より下ろし置て、船は何地行けん知る人なし、此一人日本の風俗に似せて月額を剃り、日本の衣服をきて刀一腰をさし、初めは山中にかくれ居て、杣木きる山人、又は炭焼の翁などに日本詞にて食物など乞て、その価に金子など取らせければ不思議におもひ、殊に実の日本人のさまに變りたれば、其の山家の長に告げ、段々相伝へぬれば人々皆怪しく思ひて、終に国主のもとに聞えて吏役の士あまた差し遣はし、召捕られて長崎へ送りやられぬ。其の人物、毛髪は黒くして紅毛の如くに赤からず、眼も紅毛人の目のさまにあらずから、日本人と同じ、鼻のすぐれて高さこそ同じからぬ。是いたりやらうま国の邪宗の張本にて、世界所々の国に邪宗すゝめに、巡り歩く者なるがあまた有が中に、お

めれば日本に來れる也。日本の詞にてとところどころ自ら答て、通事を不頼とかや。日本詞をさまざまに書付たる横文字の書一冊、常に手を放さず持て、之を聞き見て應對せしと聞ゆ。恐ろしき事にあらずや、此の異人、則ち長崎より江戸へ送り遣はされ、獄屋へ入おかれ其後の事は知人なし。日本海辺の所々、それより愈々用心きひしきさま、ことわり成べし。兎に角薩摩、日向、四国、紀州までの浦々、いづれの日にか呂宋の船の漂ひ來らんも知らねば、常の守り安からぬ事なるべし。常世の浪のしき浪よする美まし国とほめ置けるも、是等の蛮島南海を塞り、常世の風をへだてぬるこそいと口おしけれ。すべて邪宗は金銀を与へて人を引入るにや、右の異人も黄金おほくもち居たりとぞ。」
当時泰平の夢に酣醉を貪り居れる人々が、周章狼狽の状まことに眼に見るが如きものがある。従来例によれば此のシドチも幕府の普通の俗吏の訊問に遭って何等為すところ無く空しく惨死するか、或は一生幽囚の憂目を見たのであらうが、幸に新井白石の如き炯眼の士に逢つて日本新学興隆の一機因と成つたのは、せめてもの仕合わせであつたと言ふべきである。しかし白石とてさすがに其の識見こそ時流に卓絶せりとは云え、やはり当時一般世間の大勢は如何ともするに由なく、前後数回に亘る訊問によって、シドチが稀世の人物たることを洞察しはしたが、其の以上施すところ無く、また彼の処分に當つても、白石は「彼を支那船にでも便乗させて本国に送還すべし」と強く主張したにも係らず、当局の容るゝところとならず、そのまゝ切支丹屋敷内に幽囚され居る間に、思いがけぬ一事件が生じて為めに彼に対する処置は一層嚴酷を加へたのであつた。というのは当時処刑された切支丹信者の子で長助、お春という二人の男女あり、いつしか夫婦と成つて切支丹屋敷内の雑役に召使われ、前記黒川寿安、岡本三右衛門等の雑用を弁じて居たところ、この度シドチに配属さるゝに及び、彼より感化せられて二人とも熱心なる基督信者となり其の洗礼を受けたことが露見したのであつた。為めに彼等は夫々別房に移されて重大なる譴責を受くるに至つた。かくてシドチは数年の歳月を獄中に過ごして正徳4年(1714年)4月21日47歳を以て獄死し、長助も同年11月7日55歳にて死亡お春も次いで其の跡を追うに至つたのである。

白石がシドチ訊問の詳細は其の著「西洋紀聞」及び「采覧異言」に詳記せられ、今はこの書も容易に入手し得られるから、一切をそれに譲つて省略するが、当時の和蘭通訳が単にその片言隻語を伝うるのみで、一向に書物を読むことが出来ぬので、白石は態々幕府の書庫? から

1648年アムステルダム刊行の Joan Blaeu の世界地図を取寄せ、これを参照して手振りや態度をかりて、直接に質問したところ、シドチは此の図を見て大いに驚ろき、「今は西欧に於ても稀観の珍書である」と激賞した由である。現にこの図は東京国立博物館に保存されているとのことだが、私は未見である。また白石は「采覧異言」中に外国の固有名詞を記する為めに大いに苦心し、能う限り漢語の音訳を借りたが、それでは到底不足なので、片仮名を漢文中は挿入して之を弁じ、「東洋には字多くして音少なく、西洋には字少くして音多し」と言って其の記述の不便なことを歎じている。

シドチの渡来を最後として、爾後は外国宣教師の本邦渡来全く絶え、従って切支丹屋敷は段々に縮少の一途をたどり、既に元禄14年(1701年)には附近が分地され、同16年(1703年)伝馬町牢屋の焼失後此処に仮牢が設けられて、一般の囚人もまた一時収容せられたのであろうが、享保10年(1725年)には全く無人となって焼失し、寛政4年(1792年)松平定信老中時代に廃止され、重要書類は竹橋門内に移され、其の領地は倉庫或は旗下の士たちに分与されたという。

現在の切支丹屋敷跡は東京都史跡として指定され、現にその標識も建てゝあるが、この地は明治末期私の少年時代には樹木鬱蒼として市内でも殆んど未開の地域として残されたが、最近地下鉄の開通と共に著しく変形され昭和38年春私が立正大学英文科学生武田昭一君他数名と共に両3回の実地踏査に赴いた時は、全く滄桑の変に驚いたのであった。即ち此処は現に文京区春日町から大塚に通ずる都電同心町停留場から文京区福祉事務所角の急坂を下り、地下鉄茗荷谷駅附近の隧道を隔った道路の左右に当る一帯の地域で、茗荷谷町72番地より93番地に亘る広汎な土地であるらしく、草創時代即ち正保3年(1646年)の頃は7000余坪、周囲330間、高い石垣を繞らし空濠を控えた嚴重な規模であったらしく、現に其の附近の人

家の門牆等には、当時の余材と覚しき不相応な巨大な石材等の使われているのが見られる。其の図面は北条安房守奉行のころのものが、今日品川区戸越公園内の文部省史料保存館に三井文庫として保管されて居り、其の複写も今日誰でも入手し得られるが、シドチ入牢の頃は其の以後縮少された時らしく、その詳細の地形は不明である。現在の状況は地下鉄隧道を抜けた真すぐの道路を中心として左右に分れ、都の史跡指定標は左側の坂上に建てゝあるが、其の方は基督教会及び私人の邸宅となり、右方のやゝ広い空地も同じく私有地となって、内部には石灯籠二基、石馬二個、及び「首洗ひの井戸」と称せらるゝもの一つが残存するが、これも現に半ば以上泥土に埋もれて居る。思うにこれは信徒を逆さ吊しにした拷問の跡かと推せられるが、確かめるよすがも無い。長助、「お春」の墓と呼ばれるものも其の附近に存在し、形ばかりの石塊数個と雑木によって僅かに認められるだけで、其のあたり一面は某土建会社の材料置場と化し、足を踏み込む余地も無い。尚お聞く所に依ると目下私人の邸宅となっている附近は地下牢の跡で、最近までそれと分っていた由であり、シドチの墓の跡には榎が植えられ「ジョアン榎」と称せられたとのことだが、これも久しき以前に伐採せられて、其の跡を止めず、墓標かと思われる石標は、附近なる第六天町近藤某氏の邸内に保存せられ、また他の刑死者の墓は戸崎町無量院に移されたものが、今は離司ヶ谷墓地の一角に在る由であるが、私は未だ実検の機を得ない。要するにこの附近一帯の地域は東京都内に現存する切支丹遺蹟としては第一に挙げらるべき重要なものであるが、現状のまゝに放任すれば遠からず埋滅に帰することは明白である。それにも係らず、当局の眼は殆んど之に及んで居ないかの如くたゞ一部学者が研究の対照として其の文献上からの調査は案外行き届いて居るようであるが、現地域に対しては何等有力な保存の方法が講ぜられて居らぬのは真に遺憾の極である。

甲府盆地、農業構造の地理学的研究

—農用地の地域構造—

岡 本 兼 佳

研究目的:

昭和37年度、立正大学人文科学研究所の富士川流域総

合調査に“農業”を担当して、さらに山梨県中枢部、国中地域研究の関心を導かれ、甲府盆地農業構造の地理学的研究を進めることとした。このテーマの目標は“農業構造の地域構造”を解明することであり、このためには農業構造を系統的に分析し、地域体制としての農業構造を地域科学的に追求しなければならない。

農業事象分析の基本体系は、営農主体としての農家およびその立地村落、農産の場であり農産の基幹的手段で